



TITLE:

乳腺結核症の1例

AUTHOR(S):

横山, 敏; 林, 一彦; 佐藤, 照夫

CITATION:

横山, 敏 ...[et al]. 乳腺結核症の1例. 日本外科宝函 1960, 29(1): 351-353

ISSUE DATE:

1960-01-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/207044>

RIGHT:

乳 腺 結 核 症 の 1 例

京都大学医学部外科学教室第2講座（指導：青柳安誠教授）

横 山 敏・林 一 彦・佐 藤 照 夫

〔原稿受付 昭和34年10月6日〕

A CASE OF TUBERCULOSIS OF THE BREAST

by

SATOSHI YOKOYAMA, KAZUHIKO HAYASHI and TERUO SATO

From the 2nd Surgical Division, Kyoto University Medical School

(Director : Prof. Dr. YASUMASA AOYAGI)

A 28-year-old female was admitted to our clinic with a chief complaint of a painless induration in the right mammary gland with swelling in the right axillary lymph nodes.

10 months prior to her admission, she had undergone an enucleation for painless induration in the same lesion.

Histologically, it was proved to be a productive nodes with LANGHANS' giant cell and epithelioid cell, typical mastitis tuberculosa nodularis.

By the operative standing, the infection was investigated to occur through the axillary lymph system.

1829年 Sir Astley, Cooper によつて Scrofulous swelling in the bosomなる名称でその存在を指摘された乳腺結核症は、Duber, Ohnacker 等によつて組織学的に裏付けをされた。わが国では明治25年三宅博士によつて報告された1例を嚆矢として100例余り報告されている。

最近わが教室でもつぎの様な1例を経験したので報告する。

症 例

患者：28才の農婦，2児の母親。

主訴：右乳房部の無痛性腫瘤。

家族歴および既往症：父系祖母が乳癌で死亡。母系伯父が肺結核症で病臥中である。患者は19才で結婚，28才の現在までに2児を出産しているが，この間，3回の人工流産および2回の死産を経験している。現症発病約8ヵ月前肋膜炎に罹患し3ヵ月で治癒している。

現病歴：入院の約10ヵ月前（昭和33年2月）右乳房に小指頭大の無痛性硬結を触れ，その後漸次増大してきたので，1ヵ月後半腫瘤摘出術を受けた。しかし術後2ヵ月手術創痕部に近く，銅貨大の帯赤褐色の皮膚着色をみると同時に，その部に同大の硬結を触れるようになった。しかしそのまま放置した所，右腋窩リンパ節の腫大をきたしたので，癌性遺伝性素因のあることも考慮に入れ，再び手術を受けるため当教室を訪れた。

現症：全身所見，体格栄養中等度，体温37.4℃その他一般状態に異常を認めない。血圧140/70mmHg。血液像は，赤血球数418万，血色素量81%，白血球5800，そのうちリンパ球20%，単球5%でリンパ球および単球増多を認めない。尿中蛋白および糖は陰性，赤沈1時間値4mm，2時間値10mm，マンントウ氏反応陽性，胸部レントゲン像で，右陳旧性葉間肋膜炎および石灰化巣を認めるほか，特に現在進行性病変を思わせる所見はない。

局所所見：視診上両側乳房ともにやや萎縮性であるが両側同高である。右乳頭は左側にくらべやや萎縮して外下方に傾いている。乳頭より約2 cm外下方すなわち外下4半部に示指頭大の帯赤褐色の色素斑あり、さらにその部分より外上方に皮膚面より陥凹する0.5 cm長の手術創痕を認める。触診上、手術創痕を中心に鳩卵大の硬結を触れる。硬結は境界やや不鮮明、表面粗大凹凸あり硬度は弾性硬、皮膚とは密に癒着しているが、下層とは比較的可動性でこれを外下方に移動させると乳頭は陥没する。所属リンパ節の腫大は、示指頭大のもの1コ、小豆大のもの1コを触知し、何れも硬く境界鮮明、周囲組織との癒着を認めない。(第1図)

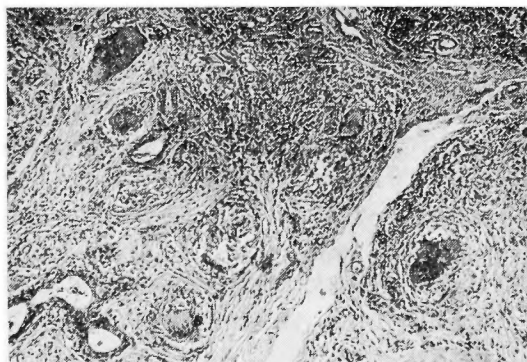
第 1 図



手術所見：切除範囲は、病変部が健康乳腺組織中に多岐性に拡大していたため、乳頭部をこえて内側半球におよんだ。胸筋とは軽度の癒着を認めたが、指頭で剝離できた。右腋窩のリンパ節腫瘍は別個に皮切を加えて摘出した。

組織所見：肉眼的には断面の境界は比較的鮮明で全体に黄赤色米粒大肉芽状を呈し、軟化および化膿巣を認めなかった。また腋窩リンパ節もほぼ同様の所見で

第 3 図



あつた。(第2図)

第 2 図



検鏡上、ラングハンス氏型巨大細胞、類上皮細胞を含む増殖性結節がみられ、コレステリン結晶を認めなかった。典型的な結節性結核性乳腺炎と診断した。また腋窩リンパ節も同様典型的結核性リンパ節炎の像を認めた。(第3図、第4図)

考 按

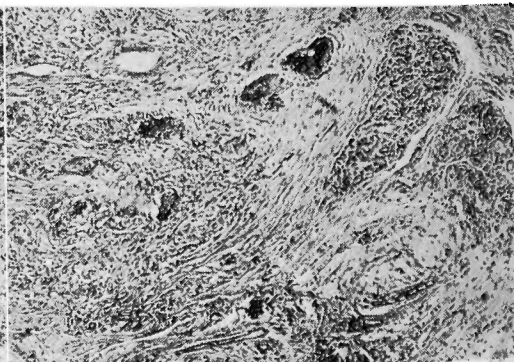
頻度：全乳腺疾患中乳腺結核の頻度は、1%内外という報告が大多数である。即ち、Mahoneyの0.16%を最底にSt. Bartholomea病院の1.5%、東北大、関口・桂外科25年間の0.81%および九大赤岩外科15年間の統計2.7%を最高とする。

性および年齢：20才から50才までの成熟婦人に多く、男性は4%にすぎない。しかし稀な例として生後6ヵ月の男児や74才の老婦にみたという報告もある。

部位：普通1側性でLeed, Floydの399例中両側性ものは13例にすぎず、象限別では特に右の外上4半部に多いとされている。本例では右外下4半部であつた。

既往症：本疾患の発病と結婚、分娩および授乳との

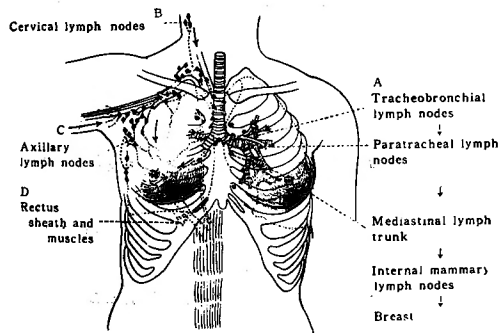
第 4 図



関係は賛否両論あり、打撲、圧迫および軽微な創傷などが誘因の1つと認められる場合がある。本症例は結婚生活9年間に、7回の妊娠、2回の正常分娩および5回の流産死産の経験があり誘因として否定出来ない。結核症との関係については、結核の病歴のない原発性のものと、病歴を有するかあるいは活動性結核を附近の臓器に有する続発性のものとがある。本症例では発病約8ヶ月前に同側肋膜炎に罹患しており後者に属するものと考えられる。高橋は本疾患の44%に既応の結核性疾患を挙げ主なものとして肺結核、胸膈結核および肋骨カリエスを挙げている。

感染経路：第1に皮膚排乳管よりの直接感染、第2に近接結核病巣即ち肋骨、胸骨、肋膜、頸部リンパ節および腋窩リンパ節等よりの直接伝播、第3に他の臓器よりの血行性およびリンパ行性感染が挙げられ特にリンパ行性の感染が最も多い経路と考えられ、Mc Keownは第5図のような要式図でその感染経路を示している。Aは胸腔内の病巣から気管支周囲リンパ節ついで内乳リンパ節が侵され乳腺におよぶもの。BおよびCは腋窩および頸部からの経路。Dは腹腔から直腹筋を経て乳腺への経路を示している。Schaefer, Deaver および Raus 等の統計的観察によると、この内最も多い経路は、腋窩リンパ節からの逆行性感染

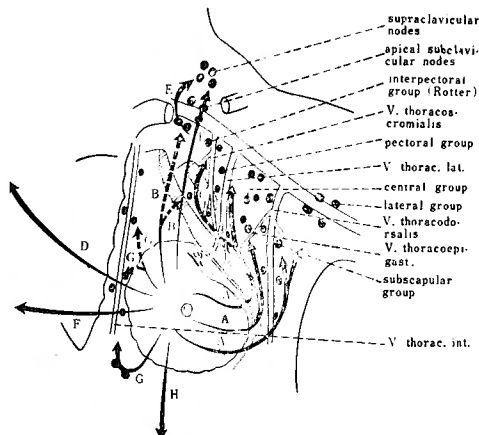
第 5 図



で、本疾患が乳房外上4半部に最も多く発生する理由と考えらる。

本症例では、その感染経路を明らかにする事は困難であるが、手術時所見で、下方筋層との癒着が軽度であった事からD経路を除外、また肋膜炎発病約1年前に授乳は中止している点から、乳頭よりの直接感染も除外しB経路即ち腋窩リンパ節からの逆行性感染が最も疑わしいものとする。Mc Keown の要式図のBおよびCのリンパ系は増田によればさらに第6図の様に

第 6 図 左乳腺をめぐるリンパ路



ABCEの通路が挙げられており当然これらリンパ系からの逆行性感染が考えられるわけであるが本症例ではこれを明らかにすることは出来なかつた。

本症例の要旨は昭和34年2月24日第354回京都外科集談会で発表した。

主 要 文 献

- 1) 秋元辰二ほか：乳腺結核の2例。外科，19，940，1957。
- 2) 綾部正大：日本外科全書。14乳腺の疾患，249，1957。
- 3) 藤野敏行ほか：結核性乳腺炎の1例。外科，13，514，1951。
- 4) 前田和博ほか：乳腺結核の4例。外科，20，1268，1958。
- 5) 増田強三：外科治療学。下巻，乳腺，印刷中。
- 6) McKeown, K. C. et al. : Tuberculous disease of the breast. Brit. J. Surg., 39, 420, 1952。
- 7) 中島芳雄ほか：乳腺結核の1例。外科，19，533，1957。
- 8) 野崎成典ほか：乳腺結核の1例。外科，20，1338，1958。
- 9) 佐藤正：男子乳腺結核の1例。日本臨床結核，11，134，1954。
- 10) 柴田清人ほか：最近経験した結核性乳腺炎3例。結核，29，527，1954。
- 11) 嶋孝ほか：乳腺結核の1例。外科，20，1180，1958。
- 12) Stibbe, E. P. : The internal mammary lymphatic glands. J. Anat., 52, 257, 1958。
- 13) 滝沢俊彦：乳腺結核の1治験例。日本外科学会雑誌，53，204，1952。
- 14) 魚住新ほか：乳腺結核の3例。外科，17，454，1955。
- 15) 渡辺千春：乳腺結核の6例。臨床外科，5，308，1950。